

視点

『北海道の潜在力を事業に変えた』

株式会社ヒューマン・キャピタル・マネジメント 代表取締役社長

(北海道生産性本部:平成28年5月理事就任)

土井 尚人(どい・ひさと) 氏



略歴:1989年に関西学院大学経済学部卒業後、安田信託銀行勤務を経て、2002年に(株)ヒューマン・キャピタル・マネジメント社を設立、様々な会社の開業や新規事業進出支援に携わるほか、経営コンサルティングや、起業セミナー、経営塾、金融機関の目利き研修などの企画・運営・講師を実施。2004年には(株)イーベック社長に就任、日本初となる海外メガファーマとの創薬開発独占権の大型取引を成立させる。ドラッカー学会理事。商学修士(小樽商科大学大学院)

22歳の時、入行とともに幸運にも札幌支店に配属された。北海道の潜在能力の高さを感じつつ、東京に転勤。本・支店での営業、企画業務の他、新規事業創出を経験した後、ある縁を得て1998年、北海道に戻ってきた。

夜間に小樽商科大学大学院に通い、そこで衝撃的な数字を目にした。

当時の北海道は、公的資本形成(土地代等を含まない公共投資額と類似)が2兆7千億円、一方域際収支の赤字(北海道の貿易赤字のようなもの)が約2兆5千億円だった。構造改革により公共投資減少の時期であり、このままでは北海道経済はますます苦しくなる。道外から大きな収入を道内に呼び込む産業の育成が必要であると、友人とともに(株)ヒューマン・キャピタル・マネジメントを設立した。

北海道には優れた地元金融機関があり、資金の供給体制は整っている。ならば、「人」という資本を活かし事業と産業を生み出したいという想いが「ヒューマン・キャピタル」である。

インキュベーションを主業として技術を事業にする中で最初に手掛けた会社は、北海道の大学の技術で遠隔医療の基礎を作り、道内の医療レベルを大きく引き上げた。また、社長も務めることとなったイーベックは、日本のバイオベンチャー初の海外大手製薬企業との大型アライアンス契約(88億円+ロイヤリティ)を締結し、アステラス製薬とも130億円+ロイヤリティという契約を結び、北海道の域際収支改善に少しは貢献できた。

大学だけではなく、多くの起業家とともに事業を育み、業歴のある企業の新規事業や道外・海外進出についても取り組む中で飛躍的に伸びている事例も多く、北海道の技術、素材の素晴らしさを感じる人が多い。

事業を創るのは人である。無機質なものに価値を与えるのも人である。人を育てれば事業は育ち、北海道に産業が育っていくとの実感を得た。

たとえ話がある。働き者の木こりがいたが貧しかった。村人が懸命に働く木こりののこぎりの刃が欠けているのを見つけ、「刃を研げばもっと効率良く同じ時間で多くの木を切れるよ」と声をかけると木こりは「わかっているけど刃を研ぐ時間がないんだよ」と答えた。

OJTも大事であるが、たまに刃を研がねば。私も大学院で刃を研いじゃないか。そこで、企業の人材育成を行うとその会社の資産が活かせ、北海道経済にもっと貢献できるという想いから人材育成に積極的に取り組んだ。特に効果があるのは継続した経営塾であると思い、北海道生産性本部の経営幹部育成塾の塾長を引き受けた。経営幹部の刃を研ぎ、仕事の現場で切れ味鋭く、ますます輝いてほしいという想いを込めて、塾に臨んでいる。

塾では、「チャンスを見つけ方」「強みを活かす」「お客様に喜ばれる経営戦略」という前向きな内容をドラッカー哲学も多用し運営している。

変化は常に起こる。必ず起こるのであれば、それを脅威ではなくチャンスと考えたほうが事業は成功する。喜んでくれるお客様を創造できれば、企業収益は潤い、従業員にも還元できる。また、お客様の喜ぶ姿は、役職員に仕事の喜びを感じさせ、仕事を通じて自己実現できる。

リーダーにとって必要なことは、成功したときは「We(私たちが)」失敗したときは「I(私は)」と考えている。組織の一人ひとりの弱みを中和し強みを活かすのが経営であると信じる。

最後にドラッカー教授の言葉で締めくりたい。「未来を予測する確実な方法がある。それは自分で未来を創ることである。」

多くの北海道の経営者・企業家と実感してきた事実である。